

言葉が能力を左右する

世界的な科学誌、「サイエンティフィックアメリカン」に、東京医科栄村大学の角田義信教授が、“日本人の脳”という論文を発表し、世界の脳諸科学を研究している学者を驚かせました。

今までは、言語だけは左の脳でこれを聴き、それ以外の音声はすべて右の脳で聴いていることが、科学の世界ではすでに証明済みとされていました。それが、角田教授の実験によりますと、「日本人に限り、鳥の声や虫の音を左の脳で聴いている」というのです。

しかも注目すべきことには、その異なった脳の仕組みが日本人の先天的な人種的特徴ではなくて、後天的・学習的なものだ、ということです。

それは、両親が共に純粋の日本人であっても、欧米に生まれ育ち、欧米語を母国語として生活している日本人の脳は、鳥の声や虫の音を、欧米人と同じように右の脳で聴いているということなのです。

角田教授は、そういう事実を実験によって証明したのです。この事実は、私たちにいろいろのことを考えさせる重要な問題を提供しています。

言葉が動物的存在である人間を真の人間にしている、ということは

すでに多くの学者によって指摘され、異論のなかった所です。だから、言葉が、人間の精神を司る脳の形成に大きな役割を演じているであろうということは、実験を待つまでもなく、予想されて然るべきです。

ところが、コロンブスの卵のようなもので、この真相が発見されてみれば「そんなことは当り前のことだ」と、言える理由はあとからいくらでも出て来ますが、角田教授の発見がなかったら、なかなか「当り前のこと」が当り前とは思えないものです。

その意味で、角田教授の発見は、「日本人の精神を司る大脳が、日本語によって形成される」という事実を証明する偉大な発見で、「日本語の特徴こそが、日本人の物の考え方を特徴づけている」ことも考えられ、さらには、「日本語の特徴を研究すれば、日本人の物の見方や考え方の特徴を明らかにすることが出来る」ことも考えられるのです。

英語の教科書にある“*There is an ox*”という文を例に考えてみましょう。普通、この文は「一頭の牛がいます」と訳されますが、実は英語には、単に「牛がいます」と言おうにもその“牛”という言葉がありません。ox という言葉は必ず一頭の牛を言う時に使う言葉で、一頭でない牛は oxen と言わなければなりません。

言葉が初めからそういう性質を持っていますから、牛を見ても、ま

ずそれが一頭か一頭でないかを確認できないうちは、「牛がいます」とは言えないわけです。

それだけではありません。ox も oxen も牡牛であって、しかも去勢された牛を言う言葉です。去勢されない牡牛は bull と言い、牝牛は cow と言います。だから cowboy というのは、わが国の“牛飼い”に当たる言葉ではありますが、その牛は牝牛なのです。

つまり、日本人は牝牡(めすおす)に関係なく、また数に関係なく、「あそこに牛がいるよ」という言い方をしますが、アメリカ人は、まず牝牡を見分け、さらにその数を確認した後でないと、そのことが言葉にして言えないのです。

貧弱な国語は貧弱な人間をつくる……

このように、言葉のもつ性質によって、物の見方や考え方がどうしても異なったものにならざるを得ないことがよくわかると思います。従って、立派な国語をもった国の人間は自然と立派な考え方をすることで立派になり、貧弱な国語をもつ国の人間は貧弱な人間にならざるを得ないというわけです。

それで、どこの国でも、国語教育に最も力を入れているのです。ま

た、その国の言葉を立派な豊かなものにするための努力をしているのです。

例えば、フランスでは、各界最高の入物によって構成されたアカデミーにより、常にフランスの標準語が吟味され、一語でも変更がある時は政府がこれを公表し、辞典も直に改訂されるほどです。

また、ドイツの小学校では、三年生まで、学習総時数の三分の二に近い時間が、国語の学習に当てられています。算数を初め、音楽、図工、体育等、他の時間を全部合わせても、国語の学習時間数にとっても及ばないのです。

このように、外国、とりわけ先進国の学校教育と比較してみる時、わが国の国語教育は著しく軽視されている、と言わざるを得ません。今はまだ、先進国の人たちの国語力に比べて、日本人の国語力は、一歩も譲らないほど高い水準を維持していますが、このまま行ったら、全く楽観を許しません。

人間の能力を左右するのが国語力である、とわかったからには、どうしたら高い国語力が養えるか、その方法を私たちは何よりも強く追求しなければならないと思います。